

2011 年度  
人間環境学部履修モデル集

履修モデルとは . . . . .	2 頁
コース制と履修モデル . . . . .	2 頁
掲載モデル目次 . . . . .	3 頁
各モデル . . . . .	4 頁～

人間環境学部

## 履修モデルとは

この学部のカリキュラムは、今までの個々の学問分野を超えた「学際的」な学びが出来る点に大きな特長があります。一見、つながりがないように思ってきたこと同士のあいだに、関連性を発見・認識して、自分のなかで「一つにつながった」という覚醒、充実感とともに視野が大きく広がることこそ、他学部ではなかなか得られない、この学部ならではの収穫です。……とはいえ、この学部の専門科目を見渡して、具体的に何と何が、どのようにつながっているのか？ ということは、皆さんの自力だけでは（特に勉強の手始めの時は）すぐには見えにくいことでしょう。「幅が広すぎてよく分からない」という実感を持ったとしても無理のないところです。そこで、各先生が、具体的なテーマを例示して、そのテーマの学び方や、そのために有効な授業のとり方（推奨科目）を、道しるべとしてアドバイスしたものが「履修モデル」です。

ゼミ（研究会）に所属する方はもちろん、ゼミの先生に質問すれば、自分の履修計画について同様の助言を得ることが出来るでしょう。ゼミに参加されない方も、興味を持った履修モデルがあれば、執筆者の先生をオフィスアワーに訪ねるなど、遠慮せずに「道案内」役である教員のアドバイスを活用することをお勧めします。

なお、各先生が掲げているテーマは、その先生が担当する講義科目やゼミの内容に重なることも多いですが、必ずしもそれに捉われずに、様々なテーマが設定されています。

## コース制と履修モデル

今までにガイダンスや「人間環境学入門」「基礎演習」の授業等でも説明を受けていることと思いますが、「環境経営」「地域環境」「国際環境」「環境教養」の4つのコースは、この学部が扱う幅広い領域のなかで、自分の学習の軸を定め、学際的な履修プランを作っていくうえで、まず大きく4通りに分けた方向性のめやすです（履修の手引き p36～38）。言い換えると、この学部を卒業するとき、どのような方面の専門的な知見・発想や技能を身につけて社会に巣立っていくのか、という「出口」を意識して設定しています。

ところで、この学部の専門科目を分類した表（履修の手引き p 17）をみると、皆さんもお気づきかと思いますが、その4コースに分けて科目が示されてはいませんね。その理由は、「学際」の性格上、一つの科目が複数のコースに関連することが多いからです。（それを一纏めに示そうとすれば、幾つも重複して載せなければならないため、個々の科目は、「人間環境学」以前からある6つの学問分野に分けて示しています。）この特質を示そうとしたのが、履修の手引き p 38 の「コース関連科目表」です。シンプルに捉えるならば、今まで自分が聴いて特に興味を持った（または「この先ぜひ履修したい」「ゼミの先生の担当科目である」等の）講義科目をみて、◎が付いているコースが、自分と相性の良いコースである、と理解してよいでしょう。

履修モデルも同様で、「このモデルはこのコース」と整然と区分できない事情があるため、次の目次ページには、関連の深いコースのタグをつけてあります。タグは2つまでに絞って記していますが、中には、3コースにまたがる、あるいは全コース共通のベースとなる、といった勉強テーマも含まれていますので、柔軟にみて頂ければと思います。



**テーマ**：持続可能な社会を目指す企業の環境経営

**関連の深いコース**：環境経営

### 1. このテーマを学ぶために

環境経営論を大学で学ぶ目的は、地球環境と両立する企業経営のあり方をじっくりと考えることです。卒業生は実社会で環境推進の実践者として活躍することが期待されています。地球環境問題の根底には経済問題があり、企業経営の変革が求められています。環境経営を理解するためには、**ミクロ経済学、環境経済論、環境経営実践論、CSR 論、EMS 論、公害防止管理論**などの関連分野を学習する必要があります。

大部分の学生は実社会での経験がないため、まず第一に「企業とは何か」を中心にして学習します。環境経営の観点から重要となる戦略論、理念と組織文化、計画と統制、リーダーシップなどが中心です。さらに「持続可能な社会」とは何かについて、エコロジカル・フットプリントやナチュラール・ステップを学習します。

つぎに環境経営について幅広く学習します。現在は時代の大転換期であり、ビジョンが重要です。「持続可能な社会」のビジョンにもとづいて、ビジョンの実現のために企業経営はどうあるべきかを考えます。ここでは、競争戦略としての環境経営と理念重視の環境経営が中心になります。この2つの視点は環境と経営の問題を考えるうえでは大変重要です。さらに環境経営を具体的に理解するために、企業の環境投資モデルをもとに、投資プロジェクトの収益性を学習します。

最後に、環境経営を実際に推進していくために必要となる環境マネジメントシステム (EMS) の手段について学習します。それらは、ISO14001、LCA (ライフサイクル・アセスメント)、環境会計、環境報告書などです。

社会人になると日々の仕事が忙しく、なかなか落ち着いて考えられなくなります。環境問題への対応には、しっかりとした覚悟が必要です。そのためには、学生時代に深く考えることが必要です。本コースでは、企業や金融機関や NGO など環境の仕事にたずさわるための基礎固めをします。

### 2. テーマに関連した推奨科目

ミクロ経済学 I II	環境経済論 I II	環境経営論 I II	環境経営実践論 I II
CSR 論 I II	EMS 論	公害防止管理論 I II	簿記入門 I II
公共経済学	国際環境政策	途上国経済論 I II	環境社会論 I II
地球環境論	環境科学 I II		

**テーマ：**環境経済論、国際環境政策（ともに環境経済学）について学ぶ

**関連の深いコース：**環境経営、国際環境

### 1. このテーマを学ぶために

21世紀は環境の世紀といわれ、深刻化する地球環境問題に対して人類はどのように対処してゆけばよいのかが問われている。この深刻な問題は全てさまざまなレベルの経済活動とともに発生しており、経済自体の仕組みやそのあり方の理解なくしてその解決や軽減も考えることができない。またそのなかで活動する経済主体も働きも複雑である。

環境経済学はこのような複雑な経済活動と環境との関わりを体系的に理解することを目的にしている。どのような要因がどのように繋がり、どのような結果を生んでいるかを経済の網目のなかで考え、どのような環境政策が要請されているかを考える契機を与える。

環境政策と一言にいっても地球規模で対処しなければならない政策から、国内で政府が行う政策、企業やNGO・NPO、個人が自主的に行うものまで幅広いスペクトラムがあり、それらのなかで効果的な政策を選択し、実行してゆかなければならない。

例えば、先進諸国における環境政策は、1970年代までは命令規制型と呼ばれる直接規制が主流を占めていたが、80年代になり、間接規制として経済的手段と呼ばれる政策手段が現れ、90年代に入ってその流れが定着したといわれている。環境保全のための経済的手段は、その原因物質の排出量に応じて汚染発生者に経済的な負担が生ずるような仕組み・制度を作り、汚染者の経済的動機に訴えて汚染量の抑制・削減を誘導する方法である。わが国の場合、このような方法の定着に時間を要しているが、いずれは導入されてゆくものとみられる。その際、政策間での特徴について、定性的な分析のみならず、定量的にもその効果を分析し、どのような政策をとるべきであるかを議論するのも環境経済学の分野である。

環境問題を別の面から見れば、地球規模でいかに持続可能な社会を形成するかという問題に関連している。そこでは、2つの課題が問われている。第1は、先進国と途上国との間の対立に見られるように、地球上での同一世代間の利害対立をどのように調整してゆくのかという空間的公平性の問題である。第2は、現在世代と将来世代との世代間の公平性をどのように保つかという時間的公正性の問題である。とくに後者は将来世代がまだ生まれていないだけに、現代世代と直接交渉ができないという特徴がある。このような問題を考えるのも環境経済学である。

種々の環境問題に対して、どのように対処してゆくのかはそれぞれの括がりに応じて適切な主体があり、それらが組み合わされて問題に対処してゆくことになる。環境経済学はその視点を体系的に与えることを目的の1つとしており、さまざまなレベルでの環境問題に対して具体的に考えるフレームワークを提供することとなる。

### 2. テーマに関連した推奨科目

環境経済学を学ぶためには、「基礎科目」のなかで社会科学分野を中心に幅広く学んでほしい。どのような環境問題があり、それはどうして起きているのかという自然科学の基礎知識も必要である。とくに関連している科目としては、**ミクロ経済学 I II**、**マクロ経済学 I II**（以上は基幹科目）、**公共経済学**、**環境経営論 I II**、**CSR論 I II**（2011年度新設予定）、**EMS論**（2011年度新設予定）、**環境経営実践論 I II**、**途上国経済論 I II**、**国際経済協力論 I II**、などの経済・経営に係わる専門科目がある。これらの科目は、きわめて密接に関連している。また、学習の予備順序としては、ミクロ経済学、公共経済学の受講が望ましい。

**テーマ**：企業の社会的責任（CSR）や経営倫理を学ぶために

**関連の深いコース**：環境経営、地域環境、国際環境

1. このテーマを学ぶために

人類が 21 世紀をよりよく生きるためには、人間の社会的行為によって起こるさまざまな問題に対応し、サステナブル社会を構築していく必要があります。このテーマでは、企業の役割に焦点を当て、多様な社会的要請と経済が共生する企業社会システムのあり方を学びます。企業は、利潤追求を最大の目的とした組織として誕生しましたが、今日では大企業の強大な経済力が、国境を超えて地球環境や人々の生活に多大な影響をもたらしています。

1990 年代初頭に顕在化した地球環境問題によって、多くの企業はサステナブル社会の構築を目指した CSR 経営の推進、多様なステークホルダーへ情報開示、NPO との協働などを実践してきました。このような努力にもかかわらず、多くの資源や汚染のフローが、持続可能な限界を既に超えてしまっているとの指摘もあります。こうした懸念に対して、企業を中核とするこれまでの社会経済メカニズムを見直す必要があるのではないかという問題提起がなされ、企業の社会的責任（CSR）や経営倫理の視点から、企業経営のあり方が問い直されようとしています。

皆さんにとって、馴染みの薄い企業経営や CSR を深く理解するためのポイントを簡単に説明しましょう。

企業経営、経済活動、社会運動などの行為と社会的課題との関連を理解するためには、経営・経済・社会・法律・政策・技術論などに関連する科目を学習し、人文・社会科学的なものの見方と考え方を身につけてください。

さらに、企業や社会システムを数理・数量的に理解するために、データの処理やモデリングなどに関わる統計学や情報技術を学習し、数理科学的なものの見方や考え方を身につける必要があります。

最後に、現代社会が内包する諸問題の解決に向けて、それらを総合的に分析・評価するスキルと分野を越えて協働するためのコーディネート能力を身につけることも心掛けてください。

2. テーマに関連した推奨科目

公共経済学	現代企業論	環境経済論 I II	環境経営論 I II
環境経営実践論 I II	CSR 論 I II	EMS 論	環境法 I II III
国際環境法 I II	環境社会論 I II	労働環境論 I II	社会統計論
環境科学 I II	エネルギー論 I II	環境モデル I II	地球環境論
自然環境論IV（保全生態学）			

**テーマ**：雇用、仕事、労働環境について学ぶ

**関連の深いコース**：環境経営、地域環境

### 1. このテーマを学ぶために

雇用や労働環境についての学習は領域融合的であり、既存の様々な分野について学際的に学ぶことが必要になります。例えば、経済学や労働経済学、経営学、社会学（労働社会学）、社会政策、労働法等です。

領域融合的な勉強は必ずしも容易ではありません。たとえば法学部で法律を勉強しようと思えば、まず入門としての法学を勉強し、続いて、あるいはそれと並行して憲法や民法、刑法、訴訟法等を順に勉強していくことになります。それは常識としてわかります。したがって、どんな本を読めばよいかについても推測が可能で、とりあえずはそれらの法律名がついた教科書を読むことからスタートできます。

ところが、雇用や労働環境のような領域融合的な分野を勉強するには、まず、どこから手をつけたらよいのか、そこで立ち止まってしまうことになります。そこで、人間環境学部でこれらのことを学ぶとしたら、どのような勉強方法が可能かについて、開講科目に沿って簡単に示しましょう。

まず、人間環境学部の4つのコースとの関連でいえば、環境経営コースや地域環境コースが中心になります。中心となる科目は「**労働環境論**」ですが、雇用問題である限り経営学（**環境経営論 I** - 以下、カッコ内の科目名は人間環境学部のもの）は重要です。その他、労働法も不可欠な一部になります（**労働環境法**）。また、この分野の勉強にとって労働組合や経営者団体の理解は不可欠ですが、そのためには社会学、とくに労働社会学や産業社会学の勉強も重要な一部になります（間接的には**現代社会論**や**環境社会論**）。また、より広い視点から労働環境を見ていくためには、働く人のメンタルヘルスや少子化問題を扱う「**衛生・公衆衛生学（I）**」も多いに役立ちます。さらに、この分野で調査する場合、聞き取り調査が重要になり、そのためには**フィールド調査論**がその方法を教えてくれます。

こうした勉強をしていくために、その前提として、雇用や労働環境が環境学一般のなかになんかどう位置づけられるかを知ることが必要になります。そのためには必修の「**人間環境学入門**」があります。また、分野に関係なく、私のようにオーストラリアの雇用問題を研究していると、英語が不可欠になることは言うまでもありません。

### 2. テーマに関連した推奨科目

人間環境学入門	労働環境論 I	労働環境論 II	環境経営論 I
現代社会論 II	環境社会論 II	フィールド調査論	労働環境法
衛生・公衆衛生学 I			

**テーマ：**人間と環境の時代の地域・都市づくりを学ぶために

**関連の深いコース：**地域環境

1. このテーマを学ぶために

私たちの生活の基盤は地域にあります。地域はある範囲でくくられた地理的空間を指しますが、それを対象とする地域づくりも、日本や世界各国の国土計画や広域地方圏プランなどの広大なものから、市町村マスタープランや地区まちづくりプランなどに至るまで、さまざまなスケールのものがあります。地域・都市づくりは、本来、空間計画（土地利用、交通、都市施設、景観など）と同時に、社会計画（人口、福祉、教育、医療、ライフスタイルなど）および経済計画（雇用、産業、財政、投資など）が一体となった総合的なものです。これらを扱うには、地域という場所の持つ固有の文化や歴史を知り、そしてまた、今日では何よりも環境問題を第一において考えてみる必要があります。

すなわち、地域・都市づくりは、さまざまな学問や技術を動員した総合的で学際的な分野です。したがって、この方面での活躍を目指そうとするには、自身で積極的に多くのものを学習する必要があります。地域や都市という対象においては、全ての分野が繋がっているのです。どの学問を勉強しても無駄ということはありません。自分の得意な分野を持つことです。経済、法律、デザインなどいずれにおいても深い学習経験が、将来必ず役に立ちます。

同時に、常に具体的な地域の対象に興味を持つことです。まちの緑、水、景観、道路、交通、バリア、住民参加、安全問題など、身近に多くの対象があります。まずは自分の住んでいるまちから具体的興味を広げていくとよいでしょう。そして国内外の都市や地域にも、その興味を広げていきましょう。世界各地で、同じような問題に多くの人が取り組んでいるのを知ることができるでしょう。この、自分の具体的な「フィールド」を持つことが、深くかつ広い問題意識に発展し、基礎的な学問への学習意欲にもつながっていくことと思います。

現場から学ぶことは重要です。また、今日では、まちづくりに関するセミナーや集いが数多く開催されています。このようなところへ積極的に足を運ぶのもよいでしょう。

授業では、**地域形成論**で地域・都市づくりの基本的な見方を、また、**都市環境論**で実際の現場の状況を幅広く学習します。**地域経済論**、**地方自治論**、**地域コモンズ論**、**環境社会論**、**都市デザイン論**、**地域福祉論**、**フィールド調査論**など一連の社会地域関連科目を押さえると同時に、法律・政治、経済・経営、人文科学、自然科学のうちのいずれかをしっかり学びとり、地域・都市づくりにおける自分の得意分野を自分なりに築いていくことを勧めます。

2. テーマに関連した推奨科目

(社会地域関連政策科目)			(関連分野科目)		
地域形成論	都市環境論	地域経済論	法律・行政関係の科目	経済・経営関係の科目	人文科学の政策科目
地方自治論 I・II	地域コモンズ論	環境社会論 I・II	自然科学基幹科目	環境保全関連政策科目	
都市デザイン論	地域福祉論	フィールド調査論			

**テーマ：**自治体環境政策として里山保全を学ぶために

**関連の深いコース：**地域環境

## 1. このテーマを学ぶために

自治体の環境政策において里山保全というテーマがクローズ・アップされています。都市では残された貴重な緑を保全し、農村では伝統的な村落景観を継承していくことなどが主な政策目的といえるでしょう。

このテーマを学ぶにあたって、まず「**地方自治論 I II**」による地方自治の基礎知識と自治体の環境政策に対する理解が不可欠です。また里山保全は、都市であれ農村であれ、地域環境の重要な構成要素として、広い意味でのまちづくりの中で考えていかなければなりません。そこで「**地域形成論**」、「**地域経済論**」、「**都市環境論**」、「**地域コモンズ論**」、「**環境教育論**」などで現代のまちづくりに関する基礎知識や考え方を学ぶ必要があります。

自治体の環境政策としての進め方についてはいくつかのアプローチがあります。たとえば法律や条例などの法的手段を理解するためには、「**行政法の基礎**」や「**環境法 I III**」の知識が必要になるでしょう。さらに都市の里山の多くは、開発のために売買の対象となる私有地です。したがって法律に関する科目では、「**民事法 I II**」も基礎知識として身につけてほしいと思います。なお環境政策としては法的手段だけではなく経済的手段というアプローチもあります。あるいは里山を守ることにについてはその価値を経済的に測定することが必要な場合があります。この点では「**環境経済論 I II**」が示唆を与えてくれると思います。

誰が里山を守るのかということであると、自治体が政策的に保全していくことはもちろんですが、地域住民や環境NPOの存在も重要です。こうした環境政策における地域社会の力については、「**NPO・ボランティア論**」、「**市民社会と政治**」、「**環境社会論 I II**」の履修で理解が深まると思います。

ところで、里山保全が自治体の重要な政策課題になったのは、それが失われつつあるからです。なぜそうした事態に至ったのかといえば、戦後の高度経済成長の過程で地域社会が変貌し、里山の価値に対する認識が低下してきたからです。そうした社会の変化については、「**現代社会論 I II**」で理解を深めてください。また里山を保全していくためには、それがかつて地域社会でどのような意味をもっていたのかということのを再認識する必要があります。里山の歴史的・文化的価値を再認識するためのヒントは、「**日本環境史論 I II**」や「**環境表象論**」にあると思いますし、「**環境哲学基礎論**」は保全ということに関する思想的そして根元的な問いを考えるにあたって有益でしょう。

最後に、里山は、地域の水環境ともつながり、また生物多様性に富んだエリアであるといわれています。したがって里山保全は、地域の自然保護であると同時に間接的には地球環境の保全にもつながっていきます。これらのことに関しては、「**自然環境論 I II IV**」、「**地球環境論**」、「**自然環境政策論**」、「**環境人類学 I II**」などで基礎知識を学んでください。

## 2. テーマに関連した推奨科目

行政法の基礎、環境法 I III、地方自治論 I II、民事法 I II、環境経済論 I II、NPO・ボランティア論、市民社会と政治、環境社会論 I II、地域形成論、地域経済論、都市環境論、地域コモンズ論、環境教育論、現代社会論 I II、日本環境史論 I II、環境表象論、環境哲学基礎論、地球環境論、自然環境論 I II IV、地球環境論、自然環境政策論、環境人類学 I II

**テーマ**：ローカルコモンズ（森林・農地・湖・川・海など）を学ぶために

**関連の深いコース**：地域環境

### 1. このテーマを学ぶために

「コモンズ」とは簡単に言えば「みんなのモノ」となるでしょう。やや厳密には「地域資源を共同で利用・管理する制度、および利用・管理の対象である資源そのもの」を指す用語です。環境問題とりわけ地域環境問題の多くは「みんなのモノ」をみんなで汚染し破壊したあるいはしつつあることで生じているとも言えます。

なぜ、みんなのモノが「誰のモノでもない」「誰もが自由に使ってよいモノ」になってしまうのか？そのメカニズムを解明し、持続的な資源利用を実現するための方策を模索することがこのテーマにおいて追求すべき課題となるでしょう。

そのためには、まず地域社会についての基礎的学習をする必要があります。市ヶ谷基礎科目の中から「社会学ⅠⅡ」を学びつつ、学部科目から「現代社会論ⅠⅡ」「市民社会と政治」「地域形成論」などを履修することでスタートするといいいでしょう。「地域コモンズ論」はまさにこのテーマを正面から取り上げていますし、「環境社会論ⅠⅡ」で具体的な課題を研究する際の基礎となる知識と研究法を身につけることができます。また、環境改善活動の重要な担い手である市民セクターの主体について「NPO・ボランティア論」を履修して理解を深めることは問題解決の方策を考える際に重要です。

農業や林業といった第一次産業に関して近年その「多面的機能」が注目されています。自然を直接に利用して、食糧や木材を得て私たちの生活を成り立たせているのですが、農地や森林の荒廃が大きな問題となっています。「人間環境特論（「食」と「農」から考える現代日本社会）」で基本的な現状把握をし、「地方自治論ⅠⅡ」や「地域経済論」によって地域社会への政治経済的視点を養うことは欠かせません。湖沼や河川も人間の活動によって改変され、その機能が失われていっています。その地域の歴史や民俗を知ることで地域の自然環境の大切さを知ることができます。そのためには「環境表象論」「日本環境史論ⅠⅡ」の学習が有用です。

もちろんコモンズの持続的な利用・管理を実現するためには、その自然への科学的知見は不可欠です。「自然環境論Ⅱ」「自然環境論Ⅳ」を履修して基礎となる知識を学ぶことをお奨めします。

### 2. テーマに関連した推奨科目

行政法の基礎、市民社会と政治、環境法Ⅰ、地方自治論ⅠⅡ、ミクロ経済学ⅠⅡ  
環境経済論ⅠⅡ、地域経済論、現代社会論ⅠⅡ、環境社会論ⅠⅡ、地域コモンズ論、  
フィールド調査論、NPO・ボランティア論、地域形成論、人間環境特論（「食」と「農」から考える現代日本社会）、環境表象論、日本環境史論ⅠⅡ、自然環境論Ⅱ、自然環境論Ⅳ

**テーマ**：環境法

**関連の深いコース**：地域・経営・国際

1. このテーマを学ぶために

人間環境学部の皆さんが、この学部をご卒業後、企業に就職される場合、公務員になられる場合、または、NPO などの活動に参加される場合のいずれであっても、環境法の基本を習得しておく必要があると思います。これは、環境法の多くが、環境関連の活動・行為に関して強制力をもって規制しているため、知らないままではすみません。

環境法を学ぶとき、まず知っておかなければならないことは、「環境法」という名前の法律が存在しているわけではなく、環境にかかわる法律分野を表す名称であるという点です。

環境法をもう少し細かく分けると、環境私法（環境民事法）、環境行政法、環境国際法、環境刑法に分けることができます。それぞれ、民事法（民法など）、行政法、国際法、刑法が、環境に関連して発展してできた分野と考えて頂ければ結構です。そのため、たとえば環境私法を学ぶためには、まず「民事法」を学ぶというように、それぞれの基本部分にあたる科目を学んだ後で勉強された方が、わかりやすいと思います。

なお、環境刑法は、ここ数年で急激に発展しつつある分野ですが、人間環境学部では「環境刑法」も「刑事法の基礎」という基礎科目もありません。このため、この分野については、他の法律分野を勉強されたのちに、ご自分で学習して下さい。

2. テーマに関連した推奨科目

行政法の基礎	環境法Ⅰ（環境公法）	環境法Ⅲ（環境法各論）	
民事法Ⅰ・Ⅱ	環境法Ⅱ（環境私法）	製造物責任法	労働環境法
国際法Ⅰ・Ⅱ	国際環境法Ⅰ（国際公法）	国際環境法Ⅱ（環境法の国際比較）	

**テーマ**：環境政策の立案に携わるために

**関連の深いコース**：地域環境、国際環境

### 1. このテーマを学ぶために

環境政策を実現するためには、法律や条例を制定するとともに、そのための予算も必要になります。その立案に関わるためには、議員になることだけが途ではなく、公務員となり立案に当たる、議員のサポートをするスタッフになる、NPOなどで案を検討し提案していくなどいろいろな途が考えられます。その途は別に考えるとして、環境問題の解決に向かおうとすると学際的に各方面の専門家のチームにより取り組むことが多くなります。従って、幅広い視野と専門的知識の両方が求められることとなりますが、文系学部である当学部の学生がまず目指すべきはコーディネートする能力でしょう。このためには、基礎科目として法学、政治学、経済学等を幅広く学ぶことはもちろんですが、自然科学系の科目に積極的に取り組んで欲しいと思います。専門科目としては、取り組んでいきたい問題領域が公害、自然保護、景観、街づくり、廃棄物、途上国の環境問題等により、また取り組む立場（公務員としてか、NPOとしてか等）によって展開に違いがでますが、基本は同じと考えてよいでしょう。そこで推奨科目には専門科目の中でもまず勉強すべき基本的な科目を中心に挙げておきます。公務員を目指す人や幅広い常識を必要とする試験を受ける人も基本的な科目の選択に気をつけましょう。また、関心のある領域が見つかっていない人も基本的な科目を学びながら、興味のもてる分野をさがしたらよいと思います。

### 2. テーマに関連した推奨科目

行政法の基礎、民事法Ⅰ・Ⅱ、国際法Ⅰ・Ⅱ、環境法Ⅰ～Ⅲ、市民社会と政治、行政学、地方自治論Ⅰ・Ⅱ、マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ、環境経営論Ⅰ・Ⅱ、都市環境論、自然環境論Ⅰ～Ⅴ、地球環境論、環境科学Ⅰ・Ⅱ、途上国経済論Ⅰ・Ⅱ、NPO・ボランティア論、地域形成論、地域経済論、自然環境政策論

**テーマ**：環境NPO・NGOを学ぶために

**関連の深いコース**：地域環境、国際環境

### 1. このテーマを学ぶために

環境保全や環境問題の緩和・解決を解決する担い手として、NPO・NGOなどの市民活動の存在が注目されています。環境問題に関わる市民活動といってもさまざまな分野にわたっていますが、主にグローバルな環境問題や海外の問題を扱うNGOと、日本国内の地域問題や環境問題に関わるNPOに大別できます。

NGOに特に関心がある方は、NGOの概要を理解するために「**NGO活動論**」を履修しましょう。また、NGOは開発途上国における開発問題、環境問題、経済協力や援助に関わります。「**国際経済協力論 I・II**」、「**社会開発論**」、「**途上国経済論 I・II**」などを履修するとよいでしょう。さらに、アフリカなどの地域との関係で、事例の中でNGOの役割を考えることもできます。環境人類学 I・IIを履修してみてください。

一方、日本国内で展開するNPOについて特に学習したい方は、まず、NPOやボランティアについての概要や今後の課題を学ぶために「**NPO・ボランティア論**」を履修して下さい。環境問題との関わりでは、「**環境社会論 I・II**」を、地域づくりやまちづくりの議論としては「**地域形成論**」や「**都市環境論**」、「**人間環境特論—環境と地域の持続性を考える**」を履修することも必要です。また、日本のNPOの活動分野でもっとも多いのは福祉系のNPOですが、福祉問題に関わるNPOについて学習するためには「**地域福祉論**」を履修しましょう。

さらに、地域の問題と関わるNPOを議論するためには、地方自治体の施策や自治体とNPOの関係についても勉強する必要があります。「**地方自治論 I・II**」、「**市民社会と政治**」などを受講するようにしましょう。NGOやNPOの活動も「人間の行動」ですが、その行動の結果が社会に対してどのような帰結を及ぼすのかという視点は重要です。「**現代社会論 I II**」を履修して下さい。

上記の内容は、便宜的にNGOとNPOをわけて説明しましたが、本来、環境問題に関わるNGOとNPOを区分することにそれほど意味はありません。環境問題に関わる多様な市民活動を理解するためには、国内外の動向を把握する必要がありますので、軸足を決めながらも双方に関連した講義を受講することを勧めます。

また、環境NPOやNGOに関わる学問分野は、経済学、社会学、政治学（行政学）、経営学など多岐にわたります。これらの学問分野の基礎的な知識は必要ですので、関連する基礎科目の履修と自主的な学習を心がけて下さい。

### 2. テーマに関連した推奨科目

行政法の基礎	市民社会と政治	地方自治論 I II	現代社会論 I II
NGO 活動論	途上国経済論 I II	国際経済協力論 I II	
NPO・ボランティア論	環境社会論 I II	地域形成論	都市環境論
地域福祉論	人間環境特論—環境と地域の持続性を考える		

**テーマ：**人間・社会と大気のかかわり

**関連の深いコース：**地域環境，環境教養

### 1. このテーマを学ぶために

大気は常に動いています。その動き方は、地球全体にわたる大スケールの動きであったり、私たちの身の回りで発生するような小さなスケールの動きであったりします。私たちが大気の動きを意識するのは、一つは心地よいと感じるときでしょう。たとえば、森や林を抜けてきた新鮮な風や夏の夕方に吹く涼風など、大気そのものの清々しさを直接感じる時です。また、草原を風が駆け抜けるときのサラサラとした音や風鈴が奏でる音を聞いたときの聴覚的な快適さ、窓のカーテンが風でそよぐのを見たときの穏やかさや、鯉のぼりが泳ぐ風景を見たときに感じる伸びやかさなどの視覚的な快適さなど、間接的な心地よさもあります。さらに、風力発電などはエネルギーを生むという点で人間の生活に貢献するものなので、間接的な快適さの一種と言えるでしょう。これに対して、大気の動きを意識するもう一つのケースは、逆に、不快に感じる時や身の危険を感じる時です。冬、冷たい北風の中を歩いていると早く家に帰りたいと思いますし、ビル風で帽子が飛ばされたときは不愉快です。また、強風で飛ばされた看板が自分に向かってきたり、高速道路で自動車を運転しているときに強い横風が吹くとハンドルをとられるなど、危険を感じる場合があります。危険どころか、大気は汚染物質や病原菌を輸送したり、台風や竜巻のような恐ろしい姿となって人や街、交通・物流、農作物に牙をむくこともあります。

以上のように大気の動きは人の生活と密接な関係があり、古来より人は、あるときは大気の動きを利用する術を考え、あるときは災害・公害という形で叩きのめされ、またあるときは、その脅威から自らを守る方法を考えて法律にも反映してきました。また、大気と人との付き合い方は国や地域によっても違い、昔から変わらないものもあれば時代の変化に応じて変わってきたものもあり、多種多様です。さらに、近年は環境問題が深刻になっており、地球規模から都市・地域規模にいたるまで、大気は環境問題の中心的な位置づけにあります。大気の挙動と人との関わりを知り、考えてゆくことは重要と言えるでしょう。

### 2. テーマに関連した推奨科目

人間環境入門	環境科学入門	環境法Ⅰ～Ⅲ	都市環境論
都市デザイン論	自然環境論Ⅰ	エネルギー論Ⅱ	環境科学Ⅰ・Ⅱ
公害防止管理論Ⅱ	国際環境法Ⅱ	人間環境特論	

テーマ：日本環境史を学ぶために

関連の深いコース：地域環境

### 1. このテーマを学ぶために

環境問題は、近年発生したもののように思われがちですが、そうではありません。人々は古くからさまざまな環境問題に直面し、その都度試行錯誤しながら最善の対策をとってきました。つまり、環境問題の取り組みには長い歴史があるのです。その環境問題発生メカニズムやその解決にむけた先人の取り組みを、それぞれの時代の政治・経済・文化と関連づけながら学び、現代の環境問題解決に資するのが環境歴史学という学問なのです。

さて、環境史を学ぶ目的には、大別してつぎの2つがあります。1つは、環境史を学ぶことによって、それにかかわる基礎的な素養を身につけ、さらに新たな人間と環境との歴史を究明することを目的とするものです。2つめは、現代の環境問題を解決する糸口を見出すために、環境史の教養を身につけることを目的とするものです。学習の目的は異なっても、環境史を理解しているかどうかは、現代の環境問題の解決に大きな影響を与えるのではないかと考えています。

それでは、環境の歴史はどのように学んでいくのでしょうか。たとえば、歴史的に人間は自然や動物とどのようにかかわってきたのか、あるいはわが国の歴史のうえでゴミ問題はいつごろから発生し、それに人間はどのように取り組んできたのか、という課題を設定しましょう。これらの歴史は、それぞれのテーマにそって歴史事実を明らかにしていく必要があります。そのためには、歴史資料（古文書、古文献、絵画、石造物など）の読解と分析が不可欠です。それらを通じて、新たな環境の歴史が判明するのです。

この学部で、わが国の歴史（主に江戸時代）資料を活用して人間と環境との歴史を直接的に学ぶことができるのが**日本環境史論 I II**です。ここでは、人間と自然とのかかわりを究明する素材として、開発と環境破壊、山林保全、動物保護、公害など、そして江戸の都市環境とのかかわりでは、ゴミ問題、リサイクル、衣食住、医療、癒し空間などの実態把握とその取り組みを多様な視点から学習しています。なお、私の研究会を希望する学生は、**日本環境史論 I II**を履修しておいてください。

### 2. テーマに関連した推奨科目

まず、歴史の基礎を理解するために「市ヶ谷基礎科目」の**日本史 I II**（日本近世史）の履修をお勧めします。「専攻科目」の推奨科目としては、**環境人類学 I II**、**環境表象論**、**環境哲学基礎論**、**日本美術の系譜**などがあります。このテーマを現代の環境問題とリンクさせて考えたい場合には、**自然環境論 I ~ V**、**自然環境政策論**、**地球環境論**、**環境社会論 I II**、**地方自治論 I II**、**都市環境論**、**地域コモンズ論**などを履修しておくのがよいでしょう。

**テーマ**：「文化的景観」の視点から地域の自然・文化遺産を見直す  
**関連の深いコース**：地域環境、環境教養

1. このテーマを学ぶために

私は、本来の専門の民俗学的視点を生かして、地域の伝統文化遺産が環境共生型の地域形成や人間形成に寄与する可能性について考察する授業や研究会を持っています。「文化的景観」は現在の梶研究会のテーマで、簡単にいえば、地域の文化遺産（人手の加わった「自然」も含む）を、共生・持続可能性といった観点から価値づける概念です。例えば日本の「里山」（自然と人間の共同作品としての生活環境）や、「鎮守の森」（＝宗教的な聖地として自然が守られてきた場所）などは好例です。「歴史的なまちなみ」なども、範囲に入ってくるほか、有形物だけでなく、無形の遺産（日々の生活技術・習俗、伝統行事、昔話・伝説ほか）、また視覚にとどまらず「五感」で感じられるものも、「文化的景観」の構成要素と考えることができます。この「文化的景観」を活用した地域形成の手法としては、エコミュージアム、エコツーリズム、グリーンツーリズム等があげられるでしょう。

この研究会に参加することを想定した履修モデルを示してみると、まず応募条件として例年「**環境表象論**」を必修としています。他の先生の授業では、テーマが地域形成に関わるので「**社会・地域関連**」の科目が第一にあげられるほか、環境というテーマに人文科学の視点でとりくむ授業、自然保護関係の授業などが有益です。

私の立場は「実学」（＝具体的に政策を立案する）ではなく、素材の価値を考察するところにあるので、2. に示す科目例のうち、特に「**人文科学関連**」以外の科目で実学の素養をもつことが望ましいと思います。

2. テーマに関連した推奨科目

地域形成論	環境社会論 I	NPO・ボランティア論	フィールド調査論
都市環境論	市民社会と政治	地方自治論 II	地域経済論
日本環境史論 I II	環境哲学基礎論	仏教の精神	古典芸能の現在
自然環境論 IV	地球環境論	環境人類学	

**テーマ**：地球環境問題について学ぶ  
**関連の深いコース**：国際環境

1. このテーマを学ぶために

地球環境の保全の問題【地球の温暖化やオゾン層の破壊など】は、21世紀の世界の最重要課題のひとつといわれています。なぜこんなことになってしまったのでしょうか。すべての原因はヒトの増えすぎと、豊かさを求め続けるためのエネルギーや資源の過剰な使用に起因します。また、こうした文明についていけない発展途上国の人々は、貧困と砂漠化、スラムといったまた別の種類の環境問題を抱えています。

いまや64億人のヒトが生き、豊かさを求めるために地球と生物自身が40数億年にわたって作り上げてきた生命の生きる舞台・環境を汚し食いつぶし、他の生物の生存領域をも奪い続けているのです。つまり地球環境問題を理解するのはいかに破壊しているかということと同時に、地球とはいかなる星か、地球の上に生物が作り上げた地球の環境の変遷とその現状を理解しなければいけないのです。そしてもとよりヒトという生物とは、ということも考えていく必要があります。

そして複雑極まりない世界の政治・経済・社会の中で、地球環境問題の改善を以下に進めていくかを考えるには、環境に関する条約や動向のみならず幅広い社会科学の知識を必要とします。

地球環境問題の解決を目指すとき、Think Globally, Act Locallyということがいわれます。つまり国内の、あるいは地域の環境問題の解決の積み重ねがまさに地球環境問題改善への道なのです。その意味では国内の諸対策と仕組みについても十分に知らなければなりません。

最後に地球の問題、世界の問題を学び議論していくには、コミュニケーション手段としての「英語」を磨くことが不可欠であることを付け加えておきます。

2. テーマに関連した推奨科目

まず「市ヶ谷基礎科目」と「スキルアップ科目」の中の英語関連科目を十分に学んでください。専門に関して、「市ヶ谷基礎科目」としては、理系の生物学、地理学、天文学などを、そして社会科学系の法学、経済学などは基礎として不可欠です。

「専門科目」の中では、地球環境論、自然環境政策論、自然環境論Ⅰ～Ⅴ、環境科学ⅠⅡ、地球科学史ⅠⅡ、エネルギー論ⅠⅡなどは不可欠です。法律・政治分野では国際法ⅠⅡ、環境法Ⅰ～Ⅲ、国際環境法ⅠⅡなど、経済・経営分野では環境経済論ⅠⅡ、国際経済協力論ⅠⅡ、国際環境政策、途上国経済論ⅠⅡなども受講することが必要です。

地球環境問題の理解と対策を模索することを通じて、語学が上手であることに加え国際的な視野を持った幅の広い教養人を目指してください。

※菊地先生は、2010年度をもって退任となりました。今年度、菊地先生の講義科目は非常勤講師の先生が担当され、2012年度からはこの分野の新たな専任教員を迎える予定です。

履修モデル作成者：菊地 邦雄

**テーマ**：自然保護（自然環境保全）対策について学ぶ（主として法律、行政の観点から）

**関連の深いコース**：国際環境、地域環境

### 1. このテーマを学ぶために

現代の自然保護（本来は「自然環境の保全」という言葉のほうが、より幅広い対象を意味するが、ここではよりイメージがつかみやすい「自然保護」を使う）とは、単に特定の優れた生態系を守るとか絶滅の恐れのある野生動植物を守る、ということだけでなく、地球の生態系そのものが人の諸活動により影響を受け始めている現在、学ぶ対象は地球環境問題としての自然保護あるいは生物多様性の保全にまで及ぶ。

自然保護を理解するには、当然ながら自然そのものの仕組みと変化を理解することから始まる。そのためには生物学を始めとする自然科学から自然の仕組みを学び、かつできるだけフィールドを体験するしかない。その上でどういう自然を、何のために、どういう方法で保全していくかを考えていくわけだが、その際には手法としての科学的方法論のみではなく、実現していくための戦略と手段、すなわち法律、行政計画、環境教育等を幅広く知る必要がある。つまり文系の専門的学習として自然保護を学ぶということは、変わり行く社会の仕組みそのものについて理解すること、社会を動かす仕組みについて理解することが必要なのである。特定の現象についてのみ深く追求する理系の学と知恵とは、また違う側面を有しているのである。

したがって自然保護を学ぶためには、自然自体を理解することをベースに、対策と手段としての法律、行政についての学習を中心にすすべてほしい。さらに国際的な条約や国連、NGO 活動等、国内の野生生物の状況、地域の開発・経済と土地利用に関する理解、環境アセスメント、NGO・NPO の活動のあり方等分離融合的知識の習得が必要である。

### 2. テーマに関連した推奨科目

自然保護をテーマに学んでいくためには、まず「市ヶ谷基礎科目」の内の**生物学、地理学、経済学、法学**等を、基礎的知識として学習してほしい。

次に「専門科目」としては、**自然環境政策論**のほか**自然環境論Ⅰ～Ⅴ**、**地球環境論**、**環境科学ⅠⅡ**等の講義を中心に、法律・政治分野の**環境法Ⅰ～Ⅲ**や**地方自治論ⅠⅡ**、さらに**日本環境史論ⅠⅡ**なども学んでいくと良い。加えて地域社会の仕組みについて知るため、**環境社会論ⅠⅡ**、**地域形成論**、**地域コミュニティ論**なども必要であろう。また現在の自然保護は地球規模の問題にも対応することが必要になるので、**国際環境法ⅠⅡ**、**国際経済協力論ⅠⅡ**、**途上国経済論ⅠⅡ**などもぜひ学んでほしい。

最後に、将来卒業後のさまざまな進路を考えた時、必ず役に立つのは外国語、特に英語の学習である。語学を含む幅広い教養と社会常識を身につけることは、すべての前提といえる。

※菊地先生は、2010年度をもって退任となりました。今年度、菊地先生の講義科目は非常勤講師の先生が担当され、2012年度からはこの分野の新たな専任教員を迎える予定です。

テーマ：環境工学の基礎

関連の深いコース：国際環境、地域環境

### 1. このテーマを学ぶために

「きれいな水」「きれいな空気」「快適な生活環境」 環境を学ぶ人にはなじみがある言葉でしょう。では、水や空気を汚す物質とは何でしょうか。水や空気を汚さないようにするには、どのようにすればよいのでしょうか。どこまできれいにすればよいのでしょうか。快適でない環境を改善するためにはどうしたらよいのでしょうか。汚染物質（汚濁物質）の種類と性質。除去の方法。快適環境の創造と維持。こうした問いに答えてくれるのが環境工学です。

環境工学を知らなくても「環境」の勉強はできます。修士論文だって書いてしまいます。文科系の大学院に行くと、「開発途上国における上水道事業民営化に付随する問題点の実証的検証」とか「〇〇市における一般廃棄物処理の限界費用の推定」みたいな、むずかしそうな論文を書いている大学院生がいます。でも、こういう学生がみな「浄水場ではどのようにして水道水が作られているのですか」とか「ゴミ焼却炉の排ガスはどのように処理されているのですか」と聞かれて、きちんと答えられるのでしょうか。あまり期待できないのが現状なのです。

環境の二文字がついた学部で勉強するのであれば、あるいは環境の仕事をしたり活動に参加したり人であるなら、水や排ガスをきれいにする方法、つまり環境工学の教科書の最初に出てくるようなことくらいは知っておくべきではないかと私は思っています。

「飲み水は絶対安全でなければいけない」「有害物質は一切使用してはいけない」「ゴミの焼却はしてはいけない」 こういうのを無茶な要求と言います。ここまでひどくはなくても、それに近い「意見」や「要求」をときどき目にします。環境工学を理解していれば、そういう要求がなぜ「無茶」なのか。実際問題として、どこまでやれるのか、やるべきなのかが見えてきます。

人間環境学部は文科系学部ですから、専門的な工学を扱う講義はありません。けれども、以下の科目を履修することで工学系の「常識」を身につけることができます。まず、**環境科学Ⅰ**と**環境科学Ⅱ**を履修してください。その上で、国家資格である公害防止管理者試験の受験を目指す**公害防止管理論Ⅰ及びⅡ**で公害防止について、さらに深く学ぶことができます。また、**リサイクル論**では廃棄物の基本的知識に始まり、処理技術、法制度など、廃棄物とリサイクルについて専門的に学習することができます。

### 2. テーマに関連した推奨科目

環境科学Ⅰ、環境科学Ⅱ、公害防止管理論Ⅰ、公害防止管理論Ⅱ、リサイクル論

**テーマ：**国際社会の平和と安全、よりよい社会の構築について考える

**関連の深いコース：**国際環境

### 1. このテーマを学ぶために

我々の住むこの地球には、現在、200 近い国家と地域があります。これらの国家間の関係により成り立っているのが、「国際社会」です。そこでは有史以来、様々な紛争が繰り返され、その反省から平和を構築・維持する制度が模索されてきました。また、現代においては、国家間関係（国際関係）の活発化による紛争の多様化、科学技術の発達による戦争や環境問題の規模の拡大・損害の不可逆性、民族自決や人権のような人々の価値観の変容による新しい問題の出現などに対応する必要が生じ、従来の「戦争」（＝武力紛争）の反対の意味での「平和」のみならず、「よりよい社会」の実現を目指す必要が出てきました。

このような国際社会の問題を解決し、国際社会の秩序を維持する方法のひとつに、国際法があります。国家間での合意・取極めのことです。国際法は国内法とは異なる概念をも有しますが、**法学**の基礎があることが前提となります。国際法の国内実施は憲法を介して行われますので、**日本国憲法**も重要です。その上で、**国際法Ⅰ**（総論）で、国際法とは何か、国家間関係の仕組みはどのようになっているのかを学ぶとよいでしょう。そして、個別の分野、たとえば海洋や宇宙における国際制度、人権問題、安全保障、国際裁判などについては、**国際法Ⅱ**（各論）で、国際環境問題については、**国際環境法Ⅰ**（国際公法）で学びます。これらの科目と並行して**国際政治科目**や**世界史科目**を抑えておくと、理解が深まります。

また、国際社会は、主権国家が共存している社会であり、国際協力をするにあたっては、各国の国内事情を考慮しながら、取極めを結ばなくてはなりません。したがって、日本の国内法（**行政法の基礎**、**環境法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ**）や、各国の環境法（**国際環境法Ⅱ**）も重要です。

国際社会について学ぶためには国内社会、とりわけ自分の国のことを知る必要があります。常に自分の国と他国との関係を意識しながら、国際社会、さらには地球規模の問題に取り組んでいくことが大切です。

### 2. テーマに関連した推奨科目

国際法Ⅰ（総論）、国際法Ⅱ（各論）、国際環境法Ⅰ（国際公法）、国際環境法Ⅱ（環境法の国際比較）、環境法Ⅰ（環境公法）、環境法Ⅱ（環境私法）、環境法Ⅲ（環境法各論）、地球環境論、自然環境政策論、行政法の基礎、法学系科目、政治系科目、世界史関連科目、英語、その他の外国語

テーマ：発展途上国の貧困と環境問題を考える  
 関連の深いコース：国際、地域

### 1. このテーマを学ぶために

私たちは、地球という有限の空間、有限の資源の元で暮らしています。このような制約があるなか、現在の先進国の人間のライフスタイルが、発展途上国の人々すべて（たとえばインドや中国に暮らす 20 億人以上の人々を想像して下さい）にも享受される日が来る、と考えるのはどうやら無理がありそうです。

一方、発展途上国においては、貧困が大きな問題となっています。貧困は単に所得が低い、お金がない、という問題にとどまりません。貧困は、健康や生命にも影響を及ぼし、人々が自らの将来を選びとる、作り上げる力をも削いでしまうものです。したがって発展途上国においては、引き続き「開発」や「発展」、「経済成長」が目標とされ、そのための努力が行われています。

では、「開発」や「経済成長」と「環境」は両立するのでしょうか。それともこれらを対立するものと捉えること自体が間違っているのでしょうか。また、途上国の人々の未来（目標）は、現在の私たち先進国の社会や人々の暮らしと同じものなのでしょうか。先進国と途上国いずれに暮らすかを問わず、「持続可能な社会の名」の下にどのような社会や経済の姿が私たちの行く末にあるのでしょうか。

在学中にこのようなテーマについて考えるためには、以下のような切り口から学び、考えることが有用だと思われます。

(ア) 発展途上国の社会や経済を知り、「開発」や「経済成長」について知る

→ 途上国経済論、国際経済協力論、社会開発論、ミクロ経済学、マクロ経済学、公共経済学、NGO 活動論など

(イ) 「環境」と「人間」や「社会」「経済」の関係について知る

→ 環境経済論、環境社会論、環境人類学、国際環境政策、国際環境法、人間環境特論、環境経営論、環境哲学基礎論など

(ウ) 日本における地域社会のありようについて知る（他国のことを良く知るには、まず日本のことを良く知る必要があります）

→ 地域形成論、地域経済論、地域コモンズ論、自然環境政策論、現代社会論、NPO・ボランティア論など

なお、上記（ア）～（ウ）とは別に、環境問題に関する自然科学的な知識も同じように重要です。

### 2. テーマに関連した推奨科目

途上国経済論 I、II	国際経済協力論 I、II	社会開発論	ミクロ経済学
公共経済学	マクロ経済学	環境経済論	環境社会論
環境人類学	地域形成論	地域コモンズ論	NGO 活動論
自然環境政策論	国際環境政策	NPO・ボランティア論	環境哲学基礎論

**テーマ：**歴史から環境を学ぶ。環境から歴史を知る。  
**関連の深いコース：**環境教養コース・地域環境コース

1. このテーマを学ぶために

**歴史学**とは、過去の出来事についての学問です。過去の特定の時間と空間の枠組みを切り取り、それに関するデータのなかから、**構造**を見つけ出していきます。そして、そうした構造が時代によってどのように変化するかを追跡したり、また構造を手がかりにべつの社会との比較をおこなったりできるのです。

さて、**人間環境学**というまさに現代の最先端の問題領域を学ぶ際に、このように過去を問題にする歴史学は、いったいどんな役に立つのでしょうか。

それには、主に二つの可能性があります。まず、ひとつは、現代の環境問題を理解するための手がかりとして、過去の歴史の歩みを学んでいくというアプローチです。さまざまな地域において過去にあった環境と人間の葛藤の経緯を知ることによって、現代の問題の複雑さを明らかにできるばかりでなく、その解決の手がかりを得ることもできます。つまり現代と過去のそれぞれの「**環境問題**」という**構造**を比較研究することが可能です。

たとえば、ヨーロッパの歴史において 19 世紀は工業化が進み、容赦ない自然の破壊、乱開発が始まった時代と考えられがちですが、最近の研究では必ずしもそうとは言えないことが明らかにされています。環境汚染や森林資源の枯渇は、すでに当時から大きな問題になっていました。森林の乱伐を戒め、その資源をあとの世代も同じように享受できるようにするための「**持続的な利用**」が必要であるという文章を、ドイツで 1804 年に出版された森林学の教科書にすでに見いだすことができます。このように、持続可能な資源の開発という発想自体は、決して新しいものではないのです。ただ、それが人類の普遍的な共通理解になるためには、数百年の時間が必要であったのです。

このような事実を知るとき、環境をめぐる人間の営みは、それ自体が人間社会の発展について知るうえで絶好の素材となりうるということがわかるでしょう。それが、環境を学んでいく際に歴史学が役に立つであろう第二の方向性です。**過去の社会の自然環境や生活環境との関わり**を手がかりに（これが構造に当たります）、その社会をより深く知ること、こうした研究手法を環境史と言います。

さらに、こうした歴史学による人間環境学へのふたつのアプローチを通じて、過去だけではなく現代の世界の問題について、そしてその未来について、より深く理解していくことが可能ですし、またそれは必要なことでもあります。歴史学に関する科目と平行して、現代のさまざまな環境についての授業科目を受講されることをお勧めします。

2. テーマに関連した推奨科目

人間環境特論 (ヨーロッパ都市環境史)	日本環境史論	環境哲学基礎論	現代社会論
都市環境論	環境社会論	社会開発論	衛生・公衆衛生学
環境人類学	市民社会と政治		

**テーマ：**中国の環境問題について考える

**関連の深いコース：**地域環境、国際環境

### 1. このテーマを学ぶために

1978年に「改革開放政策」が打ち出されて以来、中国の経済は目覚ましく発展し続けています。一方、その急速な発展によって、水不足やエネルギー不足が深刻化し、さまざまな環境問題も発生しています。

「南水北調」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？それは、長江の水を中国北部に運ぶという遠大な計画をあらわす言葉です。「調」には「動かす」という意味があります。水資源が豊富な中国南部から水不足に悩む中国北部に水を運ぶ大プロジェクトをさす言葉です。この「南水北調」は三つのルートが計画されており、そのうちの東ルートはすでに2002年の暮に着工されています。この東ルートは他の二つに比べて技術的には容易なようですが、オープンな形で人口密集地を通すため水質の悪化が懸念されており、専門家の一部からは「汚水北調」になる危険性が指摘されています。

水や大気汚染、北京近郊まで押し寄せている砂漠化、有害廃棄物の越境移動、不法リサイクルなど、中国の具体的な環境問題を検討するには中国語で書かれた事例を中国語の原文で読む必要があります。長い歴史をもつ中国の社会は複雑です。中国の環境問題に関しては、技術的側面や政策的側面からの研究だけではなく、人々の意識や文化、歴史的な側面から考察してゆく必要があります。中国語の力を磨き、中国語のなまの文献を用いて研究する必要はこれからますます強くなってゆくと思います。

基礎科目の外国語として、**必須中国語1～4**が用意してあります。必須外国語として中国語を選ばなかった学生は、**選択中国語A～C**を履修してください。夏休み、春休みを実施される一か月程度の「短期留学」に参加することもよいでしょう。また「法政大学派遣留学生制度」があり、上海外国語大学と中山大学（台湾）に関してそれぞれ2名の枠があります。

なお、フィールドスタディにおいて「**黄河流域での砂漠化防止事業を通して地球環境問題を現地で学ぶ**」が企画された場合は、参加することをお勧めします。中国の水不足の実態を知る貴重な体験になることでしょう。深刻化する中国の都市と農村の格差の問題を考える手がかりにもなると思います。

### 2. テーマに関連した推奨科目

基礎科目：必須中国語1～4、選択中国語A～C

専門科目：アクティブ中国語、地域形成論、地域経済論、環境社会論Ⅰ・Ⅱ、環境人類学Ⅰ・Ⅱ、環境法Ⅰ～Ⅲ、国際環境法Ⅰ・Ⅱ、国際法Ⅰ・Ⅱ、国際環境政策、地球環境論、自然環境政策論、途上国経済論Ⅰ・Ⅱ、国際経済協力論Ⅰ・Ⅱ、自然環境論Ⅰ～Ⅴ、環境科学Ⅰ・Ⅱ

**テーマ：「人類の自然史」から人間社会と環境との関係を考える****関連の深いコース：国際環境、地域環境**

## 1. このテーマを学ぶために

広い意味での環境問題、すなわち人間社会とそれをとりまく環境との関係に関連する問題にアプローチするための人類学的な視座は、おおまかに以下の二つからなります。第一に、全地球的スケールの生態環境を舞台としてくりひろげられてきた人類全体の歴史、いわば「人類の自然史」を念頭におきつつ人間社会と環境との関係を把握するためのマクロな視座であり、第二に、地域生態系との具体的な関係のなかで営まれている、人々の「日常的な生活実践」に焦点をあてながら人間社会と環境との関係を把握するためのミクロな視座です。これら二つの視座を身につけたうえで、両者を往復しながら具体的な問題を考えていく、柔軟で強靱な思考力をやしなうことが必要となります。「環境人類学ⅠⅡ」では、このうちのマクロな視座を身につけることが到達目標となります。具体的な内容はシラバスに書いてありますので、ここでは関連科目を紹介します。

まず、人間やそれをとりまく生態系や地球環境に関する基礎知識を身につけておく必要があります。そのためには「生命科学」「地球環境論」「自然環境論」など自然科学系の科目のなかで「生態系」「自然環境」などのキーワードをとりあつかっている講義を受講すればよいでしょう。

一方で、今日のさまざまな環境問題の原因は、すこし乱暴にいうと近代社会の膨張にあるといえますから、いったい近代社会とはどのようなものなのか、ということを知っておく必要があります。そのためには「社会学」「政治学」など社会科学系の科目、「哲学」「社会思想」など人文学系の科目のなかで「近代」というキーワードをとりあつかっている講義を受講するとよいでしょう。

もちろん、広い意味での人間社会と環境との問題は近代社会のみに存在しているわけではありませんし、たとえ近代社会における問題に焦点を絞るにしても、それとは違った社会がありうることを知っておく必要があります。また、今日的な環境問題を考えるとき、そのような社会がグローバル化のなかでどのように変容しているのかについても学んでおかなければなりません。そのためには「文化人類学」「地理学」「西洋史」などの科目のなかで「近代」「世界システム」「グローバル化」などのキーワードをとりあつかっている講義を受講するとよいでしょう。

そして環境人類学では、「人類の自然史」という大きなスケールのもとで人間社会と環境との関係を把握するという目的にしたがって、うえであげたような学問分野の知見を再解釈していくこととなります。環境人類学を履修する前にそれらを学んでいれば、すでに身につけた知識を新しい文脈のなかで理解しなおすことになるでしょうし、環境人類学を履修した後にそれらを学べば、それぞれの講義で提示される文脈と並行して、環境人類学で学んだ文脈にも位置づけながら新しい知識を吸収することを心がけてください。重要なのは、頭に知識をつめこむことではなく、その知識を、いま目の前にある問題に対処するなかで活用することです。環境問題という複雑で錯綜した問題について考えることは、そういった知識の運用能力を向上させるための絶好の訓練だといえます。

## 2. テーマに関連した推奨科目

環境人類学Ⅰ・Ⅱ	生命科学	地球環境論	自然環境論
社会学	政治学	哲学	社会思想
文化人類学	地理学	西洋史	

**テーマ**：コミュニケーション論について学ぶ  
**関連の深いコース**：環境教養

### 1. このテーマを学ぶために

コミュニケーションは人間と人間との間の基本的な問題を含みます。従って、コミュニケーションという分野は人間に関するすべての科目の基盤とは言えるでしょう。

コミュニケーションは、人間関係の中心に位置するものです。家族関係、交友関係、上下関係などといったどのような人間関係を持つとしても、コミュニケーションは欠かせないのです。この世の中に暮らす限りは、ほとんどの人は何らかの形でコミュニケーションを取らないと生きていけないのです。コミュニケーション論を学ぶことによって、コミュニケーションの複雑さが見えてきます。これに伴って、自分が周りの人をどう見ているのかを理解できるようになるが、それだけでなく、周りの人が自分をどう見ているのかと、自分が自分をどう見ているのかをわかるようにもなるのです。性別、文化、年齢、宗教などの要素はコミュニケーションに影響を与えます。この要素を研究することにあたって、なぜコミュニケーションの問題が出てくるかとその解決方法を理解できるようになります。これに加わって、批判的思考力、問題解決力、決断力、チームワーク、メディア・リテラシーなどのといったスキルも習得できます。

コミュニケーションに関連している科目に関しては、個人・社会・新テクノロジーの観点から見た人間の全般的なコミュニケーションに興味のある方は、「研究会：Human Communication」を履修すると良いのです。「グローバル・コミュニケーション」と言う科目は、異文化や他国に関するコミュニケーションの理解に繋がります。この科目では、パーソナルとソーシャルなどのローカルなコミュニケーション・スキルとともに、国際・多文化などのグローバルなコミュニケーション・スキルを学ぶので、国内だけでなく、国際的に活躍できるようになります。マスコミに関心があれば、「研究会：Mass Media and Research」はお薦めです。この科目では、日常生活に関わるマスメディアの影響を研究していきます。

### 2. テーマに関連した推奨科目

グローバル・コミュニケーション

研究会「Human Communication」、研究会「Mass Media and Research」

**テーマ：**陸水について学ぶ

**関連の深いコース：**環境教養

### 1. このテーマを学ぶために

私達の住む地球は、太陽系の中で唯一の満々と水（大部分は海水）をたたえる惑星です。水界は、人類を含めて地球上の全生物の故郷です。この事は多くの進化論研究者の一致した見解です。しかし、現在の私達の生活で直接使用される水はほんの一部しか使用されておりません。地球上（地表近く）の水の総量は約 13.8 億トンですが、大部分は海水（塩水）で約 97%を占めております。すなわち、私達が直接使用している淡水（真水）は極めて僅かなものです。この僅かな淡水を巡って国際紛争にまで発展することも多々あります。穀物 1 トンを生産するためには淡水は千トン必要であるとまで言われています。すなわち、穀物の輸出入はとりもなおさず水の輸出入と同じと考えても差し支えありません。このような事柄を念頭において、陸水学について簡単に説明しましょう。

陸水学は海洋学とともに水の学問の両翼をなすものです。その対象となるものは、河川、湖沼、地下水、氷河など内陸に存在する水域（水界）を研究する学問です。

陸水学を分類すれば、その対象とする事象により河川学、湖沼学、地下水学、氷雪学等に分類され、さらには水資源の開発や保全等の社会経済的条件にとって不可欠な水の状態および循環を主に研究する水文学や、水を生活の場（環境）としている各種陸水生物を研究すること（陸水生態学、陸水生物学）もこの陸水学の範疇に入ります。

このように陸水学は、気象学、気候学、地形学、地質学、土壌学、化学、などの地球物理学、地球化学あるいは生物学等々の総合的な知識が必要です。さらには、応用科学としての土木工学、農業工学、森林工学、土質工学、ひいては水産学などとも密接な関係にあります。

こうしてみると、陸水学は境界領域の学問の代表的なものです。

今後も人口の増加と文化の高度化に伴って陸水の需要はますます増大し、飲料水をはじめとする各種産業用水の選別と確保、陸水の汚染や保護など陸水学の応用が主要な問題となってきます。そのためにも陸水の知識を、そのさわりの部分でも学ぶ必要があると思います。

### 2. テーマに関連した推奨科目

市ヶ谷基礎科目のうち、理系の科目は基礎として必要なものです。

専門科目としては、自然環境論 I～IV、環境科学 I II、公害防止管理論 I II、リサイクル論。

1. で述べた各学問の大半は、当学部では開講されておりません。従って、本学の文学部地理学科の自然地理学関連科目あるいはデザイン工学部・都市環境デザイン工学科の関連科目の聴講を推奨します。また、他大学の理系学部で開講されている関連科目をよく調べて積極的に聴講することを望みます。

**テーマ**：科学技術のありかたについて考える

**関連の深いコース**：環境教養コース

1. このテーマを学ぶために

科学技術のありかたを考察することは環境問題を研究していく上で重要であり、そのこと自体ひとつの主要なテーマであろう。例えば、科学技術と関連して、我々の日常生活になくってはならない電力の生産について考えてみよう。日本における現在の主力は火力発電であるが、これは多大なCO2排出を伴うという現実がある。一方、原子力発電はそれが少ない反面、放射性物質を扱うことから生じる様々な問題が残されている。太陽光や風力による発電はクリーンであると言われていたが、出力に不安定性があるなど、扱いにくい性質をもつことが知られている。近年では、高効率な発電装置・設備（例えばMACCなど）の開発が進み、あるいは蓄電技術が進歩してきている状況ではあるが、環境問題を考えるとき、なおもまだ進化の途上にあると言うべきであろう。

本テーマでは科学技術の目的、役割とその現況などについてその歴史的経緯を踏まえて検討し、将来の方向性について考察する。特に持続可能なエネルギー供給と需要のありかたを考えることは、科学技術の問題と密接に関わっており、さらに温暖化などの環境問題に直結しているため、具体的なテーマとしてイメージしやすいと思われる。廃棄物処理なども含めたエネルギー政策に関わる問題であるため、法律、行政、経済、地域などの各分野における知識も重要であるが、同時に人間の歴史・軌跡、文化などに関連した幅広い概念や柔軟な考え方も必要である。（それは、今日の環境問題の起源は人類が火や道具を利用し始めたことに遡るからである。例えば火力発電もその延長線上にあるであろう。）

人間環境学部の展開科目における自然科学関連（基幹科目）は、地球の構造や自然の現況、地球上での（自然のもつ）法則性とその理解（モデル化）、そこで活動してきた人間の軌跡などに関する科目が設置されている。また今日の科学技術を考えるための前提となるエネルギーの基礎や、定量的発想を持つことを意識するための（統計などに関する）科目が配置されている。これらの科目により、自然と環境問題の関係性について理解を深めることになる。また、環境保全関連（政策科目）は自然保護・保全、環境問題発生機構と対処法など政策に関わる科目が設置されており、科学技術と社会との関係を考察する上で重要であろう。

2. テーマに関連した推奨科目

自然環境論 I~IV	エネルギー論 I・II	環境モデル論 I・II	統計概論
環境科学 I・II	リサイクル論	環境人類学 I・II	日本環境史論 I・II
フィールドスタディ (科学技術関連をテーマとしたコース)			

**テーマ：ICT を利用した地球温暖化の環境教育**  
**関連の深いコース：環境教養コース**

1. このテーマを学ぶために

地球温暖化は、もっとも深刻な地球環境問題のひとつです。ところが書店やインターネットには、間違った地球温暖化に関する論述が多数あります。これらの多くは、地球温暖化に対する理解不足や誤解に起因するものがほとんどです。

また、一般の人々の地球温暖化に対する理解も浸透していません。ヒートアイランド現象と地球温暖化を混同したり、オゾンホールに代表されるオゾン層破壊の問題と地球温暖化を混同している人もいます。また、地球温暖化対策として有効なように見える対策にも、よく考えると他の環境問題を深刻化させるものもあります。これらの中には無批判に受け入れられるものもあります。

このような地球温暖化リテラシーの低さを解決する方法のひとつが環境教育です。環境教育には様々な方法があります。インターネットをはじめとする情報通信技術（ICT）を利用した環境教育は有効な方法のひとつでしょう。インターネットは誰でも情報発信が可能な情報媒体です。本履修モデルでは、ICTを利用した環境教育を例にとり、履修モデルのコースを紹介します。

まず、環境教育の基礎を「**環境教育論**」において学びましょう。また情報の媒体であるインターネットの特性について理解する必要があります。そのために「**ネットワークとマルチメディア**」を履修し、ウェブページの作成や閲覧の方法について学びましょう。

つぎに、地球温暖化を正しく理解します。地球温暖化は大気だけでなく海洋・陸水・生物圏などが複雑に関係したシステムです。これらの基礎を「**自然環境論**」で学びましょう。その上で、地球温暖化の科学的な基礎を学ぶために「**環境科学 I・II**」ならびに「**気候変動論 I・II（開講予定）**」を履修しましょう。

なぜ間違った地球温暖化論が広まるのか、その問題の構造を明らかにし、原因を考えることも興味深い研究対象です。インターネットにおけるコミュニティーの形成に焦点を当てるのも良いでしょう。この場合には、「**環境社会論 I・II**」をはじめとする社会学の側面からの科目を履修するのが有効です。さらに、「**環境哲学基礎論**」、「**環境表象論**」などの人文科学系の科目を履修すると、環境に対する考え方を理解することができます。

ほかの観点として、インターネットにおける似非科学や間違った地球温暖化論を系統的に調べ、定量的に評価することも興味深い研究手法です。この場合には、「**統計概論**」や「**社会統計論**」を履修し、統計処理の基本と実践を学びましょう。

2. テーマに関連した推奨科目

環境教育論	ネットワークとマルチメディア	自然環境論	環境科学 I・II
気候変動論 I・II（開講予定）	環境社会論 I・II	環境哲学基礎論	環境表象論
統計概論	社会統計論		

**テーマ：**屋上緑化と太陽電池はどちらがエコか

**関連の深いコース：**環境教養コース、地域環境コース

### 1. このテーマを学ぶために

都市の環境問題の中で重大な問題のひとつは、ヒートアイランド現象です。ヒートアイランド現象を防止する取り組みのひとつは屋上緑化です。屋上緑化の効果は、ヒートアイランド現象の抑制だけでなく、夏季の冷房に消費される電力の抑制の効果もあります。したがって、電力消費の抑制は、二酸化炭素の排出の抑制にもつながり、地球温暖化の対策にもなります。

一方、屋上を利用する他の方法として、太陽電池の設置が考えられます。太陽電池は電力を自前でまかなうため、化石燃料に依存した電力の消費を抑え、地球温暖化の対策になります。

屋上緑化と太陽電池はどちらが有効でしょうか？この課題を例に、履修モデルを紹介します。

この課題にはいくつかの切り口があります。すなわち、(1)どちらがヒートアイランド現象抑制に効果があるか、(2)どちらが地球温暖化抑制に効果があるか、(3)どちらが経済的に有効か、(4)どちらが都市環境に有効か、(5)現状の政策と整合的か、など様々な切り口があります。上記以外にも様々な切り口が考えられるでしょう。このように、ひとつの命題を考える上でも、多角的な観点で考察することが重要です。

また、どちらがどのような場合にどのくらい有効かといった定量的な考察が重要になります。環境問題に対して万能な解決策はありません。どのような対策にも条件が付くのが常です。定性的ではなく、定量的に考察することが大変重要になります。

まず、環境問題を地球レベルから理解するために、「**自然環境論**」を履修しましょう。これと平行して、エネルギー問題への理解を深めるために「**エネルギー論Ⅰ・Ⅱ**」も履修しましょう。また、「**環境科学Ⅰ・Ⅱ**」「**気候変動論Ⅰ・Ⅱ（開講予定）**」は環境問題の現状と動向を理解する上で役立つでしょう。定量的な解析が重要になりますので、「**統計概論**」と「**社会統計論**」を履修することにより、データを定量的に扱う方法を身につけましょう。「**環境モデル論**」の履修を通して、環境モデルについて精通すると、定量的な評価を行う視点を身につけることができます。

まちづくりと関わる領域では、「**都市環境論**」ならびに「**地域形成論**」を履修しましょう。

さらに、経済的な側面を考える場合には、経済・経営関連の科目を履修すると良いでしょう。

本履修モデルのテーマは、松本研究会のOB 吉澤正壽君の研究会修了論文を元に作成されました。

### 2. テーマに関連した推奨科目

自然環境論	エネルギー論Ⅰ・Ⅱ	統計概論	社会統計論
環境モデル論	都市環境論	地域形成論	環境科学Ⅰ・Ⅱ
気候変動論Ⅰ・Ⅱ (今後開講予定)			

**テーマ**：持続可能な健康を目指すために

**関連の深いコース**：環境教養 地域環境

### 1. このテーマを学ぶために

地球環境問題は地球上で暮らす人間にとって重要な課題です。“持続可能性”という言葉が人間環境学部のキーワードとなっていますが、“持続可能な社会を目指す”ということは、“人間がいかに健康で快適な生活を維持していくことができるか”ということに他なりません。地球環境が破壊されると人間の健康に大きな影響を与えるでしょう。考えてみると、環境問題は健康問題と言い換えることができるかもしれません。

日本において、自殺者数が1998年から連続して12年間3万人を超えました。その特徴として、若い年代、あるいは働き盛りの50代男性の自殺が増えていることがあげられます。大学を卒業して働き始めた時、環境は大きく変化します。仕事の負荷に加えて、上司や同僚との関わりによるストレスも大きくなるのしかかってきます。そのような変化にどのようにして対応し、精神的な健康を保っていくかということもメンタルヘルス上重要な課題となってくるでしょう。現代社会においては、環境を幅広くとらえるようになってきています。産業保健の現場では、働く人を取り巻く環境として、空気環境や照明、建物などのいわゆる“ハード面”だけではなく、人と人との関わり合いといった“ソフト面”の環境もストレスの原因として重視していかなければなりません。

衛生・公衆衛生学では、現代社会における健康問題をテーマに取り上げ、様々な知識を身につけていきます。人間環境学部の4つのコースとの関連でいえば、環境教養コース、地域環境コースが中心となります。しかし、正しい健康知識を備えることは、すべての人にとって不可欠であると考えますので、コースにこだわらずに履修して頂いてかまいません。

関連科目としては、ストレスや少子高齢社会について学ぶ「現代社会論Ⅱ」、健康観について学ぶ「環境健康論」、高齢化社会における雇用、労働環境などについて学ぶ「労働環境論」、労働者を守る安全衛生法や労働基準法などの法律について学ぶ「労働環境法」、健康や高齢社会、生命倫理について学ぶ「生命の現在と倫理」などがあげられます。少しでも人間の健康に関係している科目は衛生・公衆衛生学と接点があるといえるでしょう。

### 2. テーマに関連した推奨科目

環境健康論 I II	生命の現在と倫理	現代社会論 II
労働環境論 I II	労働環境法	環境科学 I II
心理学 I II	倫理学 I II	生命科学 I II
物質と環境 I II		

**テーマ：**健康になるために、病気にならないために、今行うこと、考えること

**関連の深いコース：**環境教養、地域環境コース

### 1. このテーマを学ぶために

近頃、医療施設や薬局、テレビ CM や健康雑誌などで、「セルフメディケーション」といった単語が目につきます。セルフメディケーションとはどのような概念があるのでしょうか？

現代の医療水準は非常に高いと思われます。私たちは、体の不具合を感じるとその症状により、皮膚に関するものであれば皮膚科、目に関するものであれば眼科、風邪症状であれば内科、腰や膝が痛いのであれば整形外科とそれぞれに関係する病院を受診するはずですが、それも当たり前のように・・・その前に、ちょっと考えてみて下さい。なぜ、そのような症状が出たのでしょうか。どうして痛くなったのでしょうか。そのような症状や痛みは、どこからきたのでしょうか？

それら多くの場合は、体のどこかが異常を訴えてあらわれるサインです。体が弱っている、もしくは負担が掛かっている場合、痛みやしびれ、冷えなどの症状があらわれます。例えば、くしゃみが出るときは、「周りがほこりっぽいですよ。マスクしなさいね。」とか、咳がでるときは、「ウイルスや菌がのどにはいってきました。うがいをしっかりしてね。」などというように。また肩のこり、目の疲れは「姿勢が悪いですよ。」とか「パソコンの使いすぎです、少し休憩してストレッチしてね。」といった、サインを示してくれます。人体はとても神秘的です。現代科学を駆使しても、まだまだ分からないことだらけです。物質的なものは、遺伝子レベルまでほぼ解明されてきました。しかし、精神的な部分はいまだ解決されていません。

「**環境健康論Ⅰ**」では、「生命とはなにか」について、食事、睡眠など様々な観点から考察してみたいと思います。なぜ、ヒトは3食食べるのであろうか？ なぜ、眠るのであろうか？など普段あまり意識しないでやっていることを考えてみたいと思います。「**環境健康論Ⅱ**」では、「健康を保つために」を命題にして、近年脚光をあびている「補完代替医療」のいくつかを紹介し、それらの長所や短所について検討し理解を深めて行きたいと思います。

人間は、物質的な体を精神がコントロールして成り立っています。両者のバランスが保たれていると、病気になりにくく健康で楽しく生活することができると思われます。またヒトの生命は、周りを取り巻く環境に大きく左右されます。私たちは、その環境を選ぶこともできるし、変えることもできます。地球上に生きている私たちは、「人間があつて環境がある」のか、「環境があつて人間がある」のか・・・これらの事柄を自然に考えて行動し、普段から環境や健康について意識することで、「自分の健康は自分で管理できる（セルフメディケーションの概念）」ようになることが期待されます。

### 2. テーマに関連した推奨科目

環境科学入門、環境健康論ⅠⅡ、自然環境論Ⅰ～Ⅴ、環境科学ⅠⅡ、衛生・公衆衛生学ⅠⅡ、人間環境セミナー

**テーマ：**科学的な地球環境観の歴史を学ぶために

**関連の深いコース：**環境教養、国際環境

### 1. このテーマを学ぶために

地球環境問題を理解するためには、わたしたちがこれまで地球環境をどのように理解してきたかを、つまり地球環境観の歴史を、学ぶ必要があります。現在起こっている問題の原因は、多分、現在よりも前にあるはずです。それには「**地球科学史 I II**」や市ヶ谷基礎科目の「**科学史 I II**」を学んでください。

地球環境の現状を理解するためには、産業技術と結びついて、地球環境を人間の都合のよいように作りかえてきた—それが文明というものでしょう—自然科学が、地球環境をどのように研究しているかを理解することが重要です。それには「**自然環境論 I II III IV**」や「**地球環境論**」や「**自然環境政策論**」「**環境科学 I II**」を学んでください。

科学リテラシーのレベルが日本は国際的に見てかなり低いと言われていています。リテラシーとはもともと読み書きの能力という言葉ですが、これにソロバンを加えれば、寺子屋的な実践教育を連想します。ソロバン、つまり数学・理科の基礎的な能力—読み書き—のことです。それがかなり低いとは困ったことです。

ガリレオは、神がつくった宇宙という壮大な書物—もう一つの聖書—は数学の言葉で書かれており、数学を学ばなければ宇宙の謎を解くことはできないと言っています。

もちろん、わたしたちは科学リテラシーのレベルを上げる努力をしなければなりません、それはガリレオになるためではありません。ガリレオは当時のイタリアの市民に読んでもらいたくて学術用語のラテン語ではなくて、イタリア語で『天文対話』と『新科学対話』を書いています。わたしたちも、現代の『天文対話』や『新科学対話』を楽しく読める程度の科学リテラシーを身につける必要があるということです。そのためにも市ヶ谷基礎科目の自然科学系の科目を学んでください。

しかし、科学的な地球環境観の歴史を学ぶのに、今みなさんがもっている文系のリテラシーを使わない手はありません。哲学や文学や社会学の力を借りて、「**環境哲学基礎論**」や「**日本環境史論 I II**」や「**環境人類学 I II**」や「**生命の現在と倫理**」などを幅広く学んでください。そのことが人が環境をどのように理解してきたかを知り、今後の道を探るための大きな展望を与えてくれるはずです。

### 2. テーマに関連した推奨科目

地球科学史 I II、自然環境論 I II III IV、地球環境論、自然環境政策論、環境科学 I II  
環境哲学基礎論、日本環境史論 I II、環境人類学 I II、生命の現在と倫理  
市ヶ谷基礎科目：科学史 I II

**テーマ**：環境や環境問題を哲学する。

**関連の深いコース**：環境教養、国際環境

### 1. このテーマを学ぶために

誰もが、自分は自分なりにしっかり考えて生活していると思い込んでいます。

本当にそうでしょうか。

或るとき、学生運動家のA君から次のように詰問されました。

「先生は、戦争に反対か賛成か、どちらなのだ」と。皆さんだったらどう答えますか。

じつは、どのように答えようと、結果は同じこと！？言い換えるならば、この質問を受け入れたときに、質問者のはっきりとした意図にまんまと嵌まってしまったことになっているのです。ご用心。

さて、この例での戦争や平和ではありませんが、環境問題は間違いなくこれからの世界の最重要課題になっていきます。そのためには、しっかりと地に足の着いた若い人びとが育っていく必要があります。

「環境」「持続可能性」など普段当たり前を使う言葉を、受け売りではなく、自分でしっかりと吟味し、自分の言葉として用いるようになることが大切です。

そこで、そのための具体的な方策ですが、じつは、何もありません。自分で自分にあつた方法を探しださなくてはならないのです。学問に、HOW TO ものはありえないからです。

とはいえ、これではあまりにも無責任ですので、あえて経験から言えば、直接環境に係わらない分野の学習が大事ということになります。東西の歴史の知識はもちろんのこと、思想文芸や理数系の領域にも好奇心と興味を持って学んでいくことです。そして、自分の学習の中心とする科目をしっかりとつかんで、それを自分が納得し人に説明できるくらいまで徹底的に調べ学んでいくことです。もちろんこれから自分がやろうとする中心科目の基礎は、しっかりと身につけておかなくてはなりません。

塩野七生『ローマ人の物語』くらいは、学生時代に読んでおくように。

### 2. テーマに関連した推奨科目

市ヶ谷基礎科目関連としては、哲学・倫理学関係、社会学・政治学関係

それと英語力等は大切です。「スキルアップ科目」を積極的に受講すること。

関連する専門科目としては、個々の場合に異なりますので、直接相談に来てください。

**テーマ**：江戸時代から現代に受け継がれてきた庶民の芸能・文化（娯楽）を縦軸で学ぶ

**関連の深いコース**：環境教養、地域環境

### 1. このテーマを学ぶために

江戸時代は、高度な庶民文化・芸能が花開いた、史上まれに見る時代だったと言えます。庶民は、裕福でなくとも、様々な娯楽を積極的に楽しみ、それに参加しました。それはまた、現在のように企業が用意してくれる、テーマパーク、テレビ番組をはじめとした、受身の娯楽ではなかったのです。歌舞音曲、寄席、文芸、美術も、ほとんどが庶民が支えていた文化・芸能でした。幕府は、時に弾圧さえしました。その豊富なことは、前述の歌舞音曲等のほか、囲碁・将棋、物見遊山、祭礼、寺社詣で、各種稽古事等、枚挙に暇のないほどです。

そうした文化・芸能は、明治維新後の欧化政策、敗戦などによって、大きな痛手を蒙り、現代では教育、メディアもほとんど取り上げない、忘れられた、あるいは堅苦しい、高級な、と誤解され、敬遠されている存在でしょう。現代の教育、メディアは、グローバルにしるローカルにしる、横軸に重きをおいて縦軸を軽視する傾向が窺えます。横の視点は巾を広げてくれますが、縦の視点を欠いては、バランスを失い、見方に深みが出ません。「温故知新」。幸い、まだ今なら江戸の文化・芸能に触れることができます。江戸の文化・芸能に触れるということは、とりもなおさず、江戸庶民の暮らし、心に触れることです。現代の庶民として、縦の視点を持つという点で、それは大事なことではないでしょうか。

市谷基礎科目の人文系は、巾と深みを共にもっています。専門科目では、「**日本美術の系譜**」「**日本詩歌の伝統**」「**日本環境史論Ⅱ**」「**環境表象論**」が、縦の視点を深めてくれるでしょう。また、「**比較演劇論**」では、歌舞伎について、研究会「**比較演劇研究**」では、日本と英国の伝統演劇について、学ぶことができます。フィールドスタディ「**エコタウン飯田のまちづくり・地域の伝統芸能と社会**」では、市民で運営する人形劇フェスタに参加したり、地域に受け継がれてきた伝統人形劇も鑑賞します。研究会「**俳句実作講座**」は、日本人の伝統的な季節感や美意識を実作と鑑賞を通して学ぶことができます。また、市民による文化活動の実践については「**NPO・ボランティア論**」が示唆を与えてくれるでしょう。

私の担当する科目について言えば、「**古典芸能の現在**」で、まず江戸の文化・芸能に触れることから始めて、そこで関心を持ったら、研究会「**日本の古典芸能、その魅力を探る**」で各自テーマを持って、知識を深めます。もう一つの研究会「**ことばに親しむ**」では、古今東西を問わず、詩を取り上げますが、江戸庶民の文芸、川柳・狂歌にも挑戦します。

勢い、縦に視点を強調することになってしまいましたが、横の幅広い視点も重要であることは当然です。科目名は挙げませんが、縦・横のバランスの取れた学習が理想ではないでしょうか。

### 2. テーマに関連した推奨科目

縦の視点：古典芸能の現在、日本美術の系譜、日本詩歌の伝統、日本環境史論Ⅱ、環境表象論、研究会「古典芸能の現在」、研究会「日本の古典芸能、その魅力を探る」、市谷基礎科目の文学、歴史、芸術関連

歌舞伎について：比較演劇論、研究会「比較演劇研究」

まちづくりと地域文化：フィールドスタディ「エコタウン飯田のまちづくり・地域の伝統芸能と社会」

実作：研究会「俳句実作講座」（日原）、研究会「ことばに親しむ」（安藤）

テーマ：地域の文化を学ぶ

関連の深いコース：環境教養

### 1. このテーマを学ぶために

1990年代以降、「ココロの豊かさ重視」「地方の時代」という風潮の中、文化政策やアートマネジメントが人々の文化環境を考える新たな分野として、地方自治体や関連学会などで注目を集めています。研究会「地域の文化を学ぶ」は、今日のこうした流れを受けて開設しました。

学問としてこのテーマを学ぶにあたっては、まず内容としての芸術・文化に関心をもつことが重要ですが、市民（＝芸術・文化の消費者であり創造者）と地域（＝芸術・文化に関わる活動を可能にする場）の関係としくみを理解することが不可欠となってきます。

たとえば、内容としての芸術・文化に親しむ基礎をつくるために、とくに「場」の役割の大きい芸術として、美術・演劇の科目の履修を薦めます。「日本美術の系譜」・「比較演劇論」・「古典芸能の現在」などの講義科目や研究会「比較演劇研究」がこれにあたります。地域における美術展や演劇公演の実状と展望を考えてみてください。現場に足を運ぶことで、風土と芸術・文化との関わりを肌で感じることも大事ですので、人数上の制約はありますが、フィールドスタディ「環境と文化の都市・飯田のまちづくり・地域の伝統芸能と社会」もお薦めです。

また、地域の文化政策という芸術・文化活動を実現する制度を考えるためには、地域社会のしくみを理解するために幅広く次のような科目を学ぶことが必要です。法律・政治関連では、市民による政府・自治体への関与を考える「市民社会と政治」や地方自治の全体像を把握する「地方自治論Ⅰ」が、文化政策という特化した行政を考えるバックグラウンドとして有効です。また、芸術・文化活動といえども、お金を払って鑑賞する人がいなければ成り立たない以上、消費者や企業の行動、市場の原理などを学ぶ「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」やコミュニティ構築を視野においた「地域経済論」などが地域の文化経済学の理解につながります。そして、社会・地域関連では、地域づくり・まちづくりを系統的に学べる「地域形成論」や、近年芸術の分野でも進展がめざましいNPO法人について学ぶ「NPO・ボランティア論」、またインタビューやアンケート調査など質的調査の方法を学ぶ「フィールド調査論」などをはじめとして、「現代社会論Ⅰ」で社会と人間行動のメカニズムを学ぶことや、「都市環境論」で都市づくりを学ぶことも、文化という人間行動、都市という地域づくり、についての理解を深めることになるでしょう。

### 2. テーマに関連した推奨科目

研究会「地域の文化を学ぶ」、研究会「比較演劇研究」、日本美術の系譜、比較演劇論、古典芸能の現在、市民社会と政治、地方自治論Ⅰ、ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ、現代社会論Ⅰ、NPO・ボランティア論、地域形成論、フィールド調査論、地域経済論、都市環境論

**テーマ**：センス・オヴ・ウォンダリング——感性の狩人に

**関連の深いコース**：環境教養

### 1. このテーマを学ぶために

350名の学生の皆さんにとって350通りの履修モデルがあります。ということは、定番のモデルがなく、学生の皆さんが身のたけに合わせてモデルをつくる必要があるということになります。

- (1) 自分の**興味・関心**を中心にして、将来に続く進路という厄介で実体のないものに少しずつ理由と期待感を添加しながら、見える形にするため、とりあえずモデルを描かなければいけません。

大学1年生で自分の人生のデザインを構想し、連関する科目を選択するモデルをきちんと描ける学生の皆さんがいるかもしれないが、自らを振り返ると私にはできなかつたので何人かは「ストレイ・シープ」となり悩んでいる学生の皆さんもいるのではないかと思います。

- (2) 学生の皆さんには将来どの分野・職業に進まれても、金儲けや立身出世を追求するのに墮在せず、**心の世界を尊重する文化の伝統**に寄与するための教養の基礎を学ぶ姿勢を確立していただきたいと思います。

「暮らしは低く、想いを高く」と謳った英国の自然主義詩人ワーズワースや越後の良寛の生き方に学びつつ、大学内外にわたって文化の伝統に関する機会にふれることをおすすめします。

私には、レイチェル・カーソンが『センス・オヴ・ワンダー』の中で、子どもたちが、美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なるものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情といったさまざまな感情をもち、これらは知識にまさると言っていることに心打たれました。こういった**感性**を養うためにはセンス・オヴ・ウォンダリング (the sense of wandering) の赴くまま「オデッセイの旅」を続けられるよう願っています。迷うことから**感性**は磨かれます。

### 2. テーマに関連した推奨科目

1. の主旨から、私には受講したことのない具体的な科目の推奨は差し控えさせていただきます。

**心の世界を尊重する文化の伝統**を内容とする科目群をシラバスを参考にして選択されますように。意欲のある上級生たちは他学部、他大学のゼミやサークルにもぐり込んで、センス・オヴ・ウォンダリングの真骨頂ぶりを発揮しています。社会学、経済学、歴史学、哲学、倫理学、文化人類学、美学、芸術、文学、演劇、言語学、創作講座、自然科学概論など幅広く選択することをおすすめします。